

学校危機予防の免疫力を高める道德教育¹

—— ソーシャル・エモーショナル・ラーニングの枠組みから ——

渡辺 弥生 (法政大学)

本論文の目的は、道德教育の視点から SEL をどのように活用できるかを考え、レビューをもとに考察している。しかし、必ずしも道德の教科に導入すべきという狭い考えに縛られるものではない。むしろ、他の教科であるとか、学校への導入の仕方など、ベストアプローチを議論していくことが望ましい。学術研究者の視点に立つと、こうした議論も学会内に閉じられてしまうことや各研究者の推進するプログラムの普及にのみエネルギーが注がれる傾向がある。しかし、学会として、SEL の考えを広く普及することを念頭に一層の社会的貢献を考えていく必要があると考えられる。

今回のレビュー論文の掲載誌である *Journal of Moral Education* は Taylor & Francis 社が発行しており、世界中の研究者や教育者に広く読まれている。道德教育に関する学際的な研究を扱う国際的な学術雑誌である。1971 年に創刊され、道德哲学、心理学、教育学、社会学などの幅広い視点から、道德教育の理論、実践、政策に関する研究を発表しており、私のこの論文やこの論文を刊行している Association for Moral Education (AME)

は、道德教育に関する研究と実践を促進する国際的な学会であり、1976 年に設立され、心理学、哲学、教育学、社会学などの多様な分野の研究者や教育実践者が集う学際的な組織として活動してきている。特徴として①学際的アプローチに着目しており、心理学、教育学、哲学など理論的な研究から、実証研究や教育政策に関する研究まで幅広くカバーしている。②国際的なネットワークがあり、世界各国の研究者や教育実践者が参加し、道德教育の最新動向を議論してきた。欧米を中心に、日本やアジアの研究者の発表も増加している。

近年では、デジタル時代の道德教育、人工知能 (AI) と倫理、グローバル市民教育など、時代のトピックにも対応している。③政策と実践への影響に重点を置いており、教育政策立案者や教育実践者に向けた有益な知見を提供している。学校教育、家庭教育、コミュニティ教育に関する応用研究を推進している。

最初にこの学会に参加したのは、思いやりや公正について研究していた大学院生の時であった。その後、ハーバード大学の教育学研究科にサバティカル的機會をいただき、「役割

¹ 元論文は Watanabe, Y. (2024). Enhancing School Crisis Prevention Immunity through Moral Education: Insights from the Framework of Social and Emotional Learning. *the Journal of Moral Education* DOI: [10.1080/03057240.2024.2437198](https://doi.org/10.1080/03057240.2024.2437198)

取得能力の発達段階」やそのエビデンスをもとにした「Voices of Love and Freedom」という思いやりを育てる教育で有名な Selman 先生と参加して、多くのことを学んだ学会である。リピーターの多い学会である。

その学会のジャーナルに日本の SEL の取り組みについてのレビューが掲載されることになったのは感慨深い。SEL 学会で一緒にしている方々の取り組みをできるだけレビューしたが、今後も継続して発信していこうと考えている。

本研究のレビューの要旨をまとめると以下のようになる。

道徳教育の新たなアプローチ：SEL の可能性

近年、日本の学校現場ではいじめ問題が深刻化しており、道徳教育の重要性が再認識されている。特に、2015 年の学習指導要領の改訂により、道徳が「特別の教科」として正式に位置づけられた。しかし、従来の道徳教育にはエビデンスに基づいた指導方法が不足しており、より実践的なアプローチが求められている。そこで注目されるのが (SEL) という新たな教育的枠組みである。本稿では、SEL の意義とその普及の可能性について論じる。

SEL とは何か

SEL は、1990 年代後半に提唱された教育的枠組みであり、自己理解、他者理解、責任ある意思決定、セルフマネジメント、対人関係の 5 つのコアスキルに焦点を当てている。これらのスキルを育むことにより、単なる道徳的行動の習得にとどまらず、生徒のウェルビーイング（幸福感）の向上が目的とされている。

特に、OECD（経済協力開発機構）が提唱する「OECD Future of Education and Skills 2030」では、未来の教育において幸福を重視するこ

との重要性が指摘されている。デジタル技術の発展により、情報が瞬時に得られる時代だからこそ、感情を抑圧せずに健全な心の発達を促す教育が求められている。

日本における道徳教育の現状と課題

日本の道徳教育は、これまで主に読みものを理解させることを中心に構成されてきたが、現在では「考え、議論する道徳」へとシフトしている。生徒が実際の社会問題に向き合い、自ら考え、議論することで道徳的価値観を育むことが求められている。しかし、現在の道徳教育には以下の課題が存在すると考えられる。①エビデンスに基づく指導法の不足：道徳教育の効果を科学的に検証する取り組みが十分に行われていない。②感情教育の欠如：認知スキル（思考力や問題解決能力）の育成は進んでいるものの、感情リテラシーなどの非認知能力の教育が十分でなく、生徒の心のケアが不十分である。③デジタル化による課題：オンラインいじめの増加や、デジタル環境におけるモラルの問題に対する教育が追いついていない。これらの課題に対応するためには、道徳教育に SEL の要素を取り入れ、認知スキルと社会的・感情的スキルを統合するアプローチが必要である。

SEL の導入による効果

SEL を導入することで、以下のような効果が期待される。①生徒の対人関係能力の向上：自己および他者の感情を理解し、共感する力を育むことで、いじめの予防や対人関係の改善が期待される。②学校全体のウェルビーイングの向上：感情の調整やストレス管理のスキルを学ぶことにより、生徒の精神的健康が向上し、学校生活がより充実する。③学業成績の向上：感情的な安定が学習意欲を高め、学業成績の向上に寄与することが国内外の研

究によって示されている。

日本における SEL の取り組み

日本では、SEL の普及はまだ十分ではないが、一部の学校では導入が進んでいる。ここでは、幼児教育における実践、小学校におけるクラス環境の改善、中学校におけるいじめ防止対策を紹介した。

文化的背景を考慮した SEL の導入

SEL の原型は北米で開発されたが、日本に導入するには文化的な適応が不可欠である。日本では「和の精神」を重視する文化が根付いており、個人の感情表現よりも集団の調和が優先される場面が多い。そのため、SEL のプログラムを日本の教育現場に適用する際には、文化的背景を考慮したカリキュラムの開発が求められる。

また、デジタル化の進展により、オンライン上での道德教育の可能性も広がっている。

例えば、AI を活用した感情教育プログラムの開発や、VR を用いた道德的ジレンマの体験学習など、新たな技術を取り入れることも有効である。

まとめ

道德教育の効果を最大限に引き出すためには、従来の知識中心の教育から、社会性や感情リテラシーを重視したアプローチを加味した教育へと移行する必要がある。SEL は、生徒が単に「より道德的」になることにとどまらず、より健康的なウェルビーイングを実現するための重要な手段として活用可能性の大きい考え方である。

今後、SEL を日本の教育システムにどのように統合していくかが大きな課題となるが、エビデンスに基づいた実践を推進し、生徒一人ひとりの成長を支援する道德教育の在り方を模索していくことが求められる。